

研究課題：口腔 Quality Of Life(QOL)と口腔及び全身状態の関係に関する疫学研究

研究者名：高橋克<sup>1)</sup> 別所和久<sup>1)</sup> 浅井啓太<sup>1)</sup> 山崎亨<sup>1)</sup> 家森正志<sup>1)</sup> 中山健夫<sup>2)</sup>

別所和久<sup>1)</sup>

所属：<sup>1)</sup>京都大学大学院医学研究科感覚運動系外科学講座口腔外科学分野

<sup>2)</sup>京都大学大学院医学研究科社会健康医学系健康情報学分野

【目的】平均寿命延長に伴い、重要な課題として健康寿命が注目されており、全身の QOL(Quality of life)の向上とともに口腔内の QOL の向上が重要な課題となっている。口腔・摂食機能や口腔疾患は全身の健康、栄養状態、構音のみならず、心理的、社会的に影響を与える。そのため、口腔・摂食機能、口腔疾患などの口腔内の状況と全身の健康との関連は特に注目すべきものである。しかし、口腔の QOL と口腔の状況および全身の状況との関係についての報告は少ない。そこで、われわれは、口腔関連 QOL 指標である General Oral Health Assessment Index(GOHAI)を用いて、口腔の QOL と口腔および全身の状況との関係について検討した。本研究の目的は、主観的指標である口腔関連 QOL について GOHAI を用いることにより客観的に評価し、口腔関連 QOL に関わる口腔内の因子や全身との関係を明らかにすることである。

【方法】滋賀県長浜市在住の市民であり、ながはま 0 次予防コホート事業に参加された参加者のうち、中年期(45 歳から 64 歳)、前期高年期(65 歳から 75 歳)までの男女 6751 人を対象とした。GOHAI に関する質問紙調査、全身の状況に関する調査として生活習慣、既往歴、内服薬に関する調査、口腔の状況に関する調査として、う蝕経験(DMF)歯数、地域歯周疾患指数(CPI)、アタッチメントロス(AL)を測定した。性別、年齢を中年期、前期高年期で層別化し GOHAI との関係を解析した。

【結果】GOHAI は、男性が有意に高く、年齢は前期高年期の女性で有意な相関を認めた。口腔内の状況は、DMF 歯数はすべての年代で、CPI は中年期で、AL はすべての年代で、増悪に伴い GOHAI が有意に低値だった。全身の状況については、中年期では過去 1 年間のストレスが大きいと感じるほど GOHAI は低値を示し、不眠や脳卒中の既往、睡眠薬、抗不安薬、抗凝固薬使用のある参加者が有意に低値だった。前期高年期では不眠の既往ある参加者が有意に低値であった。

【結論】本研究の結果から、口腔関連 QOL の向上には、定期的な歯科受診などを行い、口腔衛生状態を良好に保つ事が重要である事、さらにストレスマネジメントを適用し、ストレス反応を緩和する事によって口腔関連 QOL を向上される事が出来る可能性が考えられた。また、脳卒中などの患者においては、歯科医師や歯科衛生士によるプラークコントロールを行う事が口腔関連 QOL を向上させるかも知れない。口腔関連 QOL を向上させる方法について、本研究の結果を踏まえさらに検討していく必要があると考えられた。